

## 論文

## 車椅子使用者の社会活動を支援するための被服構成

—「ハレ」着の事例研究—

猿 田 佳那子

生活科学部・人間生活学科

## Abstract

This report is one of the case studies I have done since 2002. It discusses the structure of clothing that is suitable for various occasions such as an entrance ceremony, a commencement, a funeral, a wedding and a summer festival. For each occasion, this report outlines various disabilities and states some difficulties relating clothing in disabled persons' lives. In addition, this report explains the structure of clothing which I actually made, and examines the merit of the structure of clothing for supporting wheelchair users' social activities on the basis of data collected from them and their families.

I found that the way of making the bottom part of clothing (that which is between the person's body and the seat of the wheelchair) is important, as well as extending the size of armholes. For women in wheelchairs, a wrap skirt is superior to any other form of clothing. A kimono as "haregi," a standard form of best clothes, can be worn relatively easily by people who have difficulty in moving their limbs. Through research for this report, the following findings are confirmed: Clothing has a social function, and owning clothing suitable for a "hare" day, a special day of public ritual, contributes to a disabled person's individual dignity.

## 要 旨

本報は、2002年から現在までに筆者がおこなってきた事例研究のうち、入学式、卒業式、結婚式など「ハレ」の場にふさわしい服装を求めた被服構成をとりあげるものである。各事例について、障がいの概要を述べ、衣生活上の困難を整理し、実際に行った被服構成を述べ、当事者や家族などから得た情報をもとに車椅子使用者の社会活動を支援するための被服構成の特質を考察した。その結果、被服構成に必要な技術は、いわゆる健常者の衣服をとりあつかう場合と変わらないが、不都合な点や要望を聞き取り、それを被服構成に反映するにはいくつかの特異性が認められる。そこで、被服構成技術と衣生活環境の側面から留意点をまとめた。上半身着については座面以下の処理方法とアームホール寸法の拡大が重要であること、女性の下半身着については巻きスカート形式の特長が明らかになった。女性の「ハレ」着の定番である和装は、関節可動域が小さくなった人にも無理なく着用できる要素を持っている。本報にかかわる調査をとおして、衣服の持つ社会的な機能を実感し、「ハレ」の場にふさわしい服装の用意があるということが、各個人の尊厳にかかわることを再認識した。

---

The Structure of Clothing for Supporting  
Wheelchair Users' Social Activities : A Case  
Study of "Haregi," Best Clothes

## 1. はじめに

これまで、既製服着用に関する事例を対象として、訪問調査に基づいて新調リフォームの事例研究を進めてきた。そのなかで、病院や自宅での服装については、障がいの種類や程度によって種々な問題はあつたものの、市販の既製服から選択できそうなのがわかつた。しかし社会人として不可欠な、「ハレ」の場にふさわしい服装を求めようとしたとき、その選択肢は少ない。

本報では、2002 年から現在までに筆者がおこなつてきた事例研究のうち、入学式、卒業式、修了式、葬儀、結婚式、夏祭りについて、場にふさわしい服装を求めた被服構成をとりあげる。各事例について、障がいの概要を簡単に述べ<sup>①</sup>、衣生活上の困難を整理し、実際に行つた被服構成を述べ、当事者や家族などから得た情報をもとに車椅子使用者の社会活動を支援するための被服構成の特質を考察する。

## 2. 事例

### 事例1 子どもの結婚式に出席する父親 A さん

#### 1) 障がいの概要

頸髄損傷。介助用車椅子を使用。安定した座位を保てないので、固定ベルトを着用。排泄、着脱ともに全面的な介助を要する。通勤・通学などはしていない。顎で操作する電動車椅子を準備したが、痙攣発作が起きることがあり、操作が困難。自宅生活で主たる介護者は妻。

#### 2) 衣生活上の困難

関節の拘縮があり、アームホールが小さい服に袖を通すことが困難である。外出の機会は少なく、着脱の困難を考えて、ニット素材か、かなり大きいサイズ<sup>②</sup>の衣服を着ることにしている。

#### 3) 被服構成－結婚式に着用するジャケットとシャツ (図1)

座位固定ベルトが隠れるように、フロントダーツの一部をほどいてスリットを設けた (図1-2 矢印)。肩関節の可動域が狭いことに対応

するために、ジャケットの後ろ中心の縫い目をウエストあたりまでほどきコンシールファスナーあきにした。衿の後ろ中心は切り開き、面ファスナー留とした (図1-3 矢印は、あきどまり)。

シャツについては、ジャケットよりもアームホールが大きく、肩パッドもないので、後ろ中心を開かなくても着用可能と判断し、右の袖下から脇にかけて縫い目をほどき、ファスナーあきにした (図1-4 矢印は、あきどまり)。

#### 4) 気づき

日常生活において、ジャケットなどは袖を通すことができないため、前後逆に羽織つて防寒に用いたりしている。このため礼装は無理と A さんは考えて、結婚式に欠席するつもりになっていたが、子どもの強い希望で出席することにした。介護にあたっている A さんの妻は、頸髄損傷前に着用していたジャケットのリフォームのみを考えていたが、ジャケットのリフォームが決まると、中に着るシャツも着用困難であることに気づいた。フォーマルなシャツは着る機会もないだろうということで、手放していたとのことであつた。

A さんの場合は、この事例の時点で、頸髄損傷の起因となる事故からの経過年数が約 5 年であつたが、足指の変形があまり進んでいなかったもので、損傷前に着用していた革靴を着用できた。また細身の体形を維持できているため、損傷前に着用していた礼装のパンツもそのまま着用できた。車椅子生活が長期間に及ぶとこれらの着用が困難になる事例はめずらしくない。フォーマルシャツが着られなくなっていることは、筆者が指摘するまで A さんも妻も気づかなかつた。寝衣を中心とした日常を強いられている人の場合、いざ礼装をしようとしたときには、本人でさえ気づきにくい潜在的な困難があることがわかつた。

## 事例2 大学の入学式に出席する男子大学生 B さん

### 1) 障がいの概要

筋ジストロフィー。電動車椅子と人口呼吸器を使用。安定した座位を保てないので、固定ベルトを着用。排泄、着脱ともに全面的な介助を要する。高等部までは病院に併設の養護学校<sup>③</sup>に在籍していた。自宅生活での主たる介護者は母親。

### 2) 衣生活上の困難

関節の拘縮がすすんでおり、アームホールが小さい服に袖を通すことが困難である。上半身が不安定なため幅広い座位固定ベルトを装着すると、Tシャツのデザインなど、Bさんのこだわったファッションのポイントが隠れてしまう。ほとんど体を動かすことができないので、硬い素材や、殿部や背面などに厚さが不均一な部分がある衣服を長時間着用すると、褥瘡の心配がある。

### 3) 被服構成－入学式に着用するジャケット (図2)

ダークスーツのジャケットについて、①褥瘡を予防し、また着脱の際に座面から上体を持ち上げなくてもすむように、後ろ身頃の座面以下をカットし、③座位固定ベルトを隠すため、両脇を裾までほどいてベンツとし、下端は面ファスナー留め (図2矢印) とした。

### 4) 気づき

入学式に備えてダークスーツを入手してあったが、着用が困難であることに家族や本人が気づいたのは式の数日前であり、急遽リフォームを行った<sup>④</sup>。ジャケットの着用困難に気づきにくかったのは、養護学校高等部まではジャージ素材などの衣服で日常生活の大半を送ってきたためであろう。一般的には市販衣服の号数が合えば着用可能であり、生活全般が劇的に変化する時期において、式の服装について具体的な着用手順に思いを至らせなかったことはやむをえないことと思われる。

## 事例3 葬儀・法事などに出席する礼装を必要とする女性 C さん

### 1) 障がいの概要

頸髄損傷。短時間の立位、整容や調理など身の回りの生活動作は可能。自走手動車椅子使用。留置カテーテル使用。

### 2) 衣生活上の困難

50歳代の女性として葬儀や法事など礼装が必要な場面が増えてきた。排尿のため留置カテーテルをつけているので、蓄尿袋にも目立ちにくく礼装と違和感が少ないカバーがほしい。

子どもの結婚式に出席する礼装を入手するために、苦労した経験がある。外出や試着が困難なので小売店は利用しにくく、通販カタログでは色見本や生地見本を送ってもらうなどしても、なかなか希望通りのものをみつけれない。手動車椅子をこぐために、袖丈は七分あるいは八分ていどが望ましいのだが、市販の規格サイズでは、身頃の周径が適当なものを購入した場合、肩幅が余り袖丈は手の甲を覆うほどの長さになることが多い。

### 3) 被服構成－ブラウスと巻きスカートを布から新調 (図3)

Cさんは被服構成に関して知識が豊富であり、デザインに関する好みもはっきりしている。そこで、フォーマル用衣料の布地から新調することにした。

上半身着のブラウスで特に考慮した点は、①自走車椅子使用のためにアームホールや上腕部のゆとりを多くすること、②腹囲が大きくなっているのを目立たないようにゆとりを調整すること、③自走用の車椅子のタイヤにすれないように袖丈を八分ていどにすること、④座位に合わせて前身頃を短く、後ろ身頃を長くすることである。トータルで試作してから本縫いに入った。また、縁取りのブレードやボタンはブラックフォーマル用に特化された副材料を使用した。

車椅子利用女性の下半身着として巻きスカートが便利であることはすでに指摘されている<sup>⑤</sup>。下半身着は、巻きスカートと市販のパンツを組

み合わせることとした。これは、法事などの場所まで移動するときには生活動作をしやすいようにパンツスーツとして着用し、儀礼時にはロングスカートと組み合わせるのが使いやすいと考えたからである。そこで、パンツを着用して座ったままで、パンツの上に重ねて巻きスカートを着用できる構成とした。具体的には図3-4・図3-5のように、ひざから下のみを環状に縫製し（図3-5 C.B. 部分を縫合する。前中心は「わ」、後ろウエストで打ち合わせて着装する（図3-4 矢印は面ファスナー）。裾にはブラウスと同じブレードをつけた。

蓄尿袋カバーも共布で作成した。

#### 4) 気づき

布から新調すると被服構成上の自由度が増し、かなり特異な形態も作り出すことができる利点がある。しかし被服構成に関する予備知識がない人にとっては、布から衣服になったときへの連想が難しいこと、一品製作であることから布地や副材料の特性と衣服デザインが適合するかどうか予見しにくいことが欠点となる。

Cさんは、筆者がおこなったアンケート調査時<sup>⑥</sup>に極めて詳細な図入りで回答をよせ、はっきりとした要望がくみ取れたので、詳細な相談<sup>⑦</sup>を重ねながら製作していくことができた。

### 事例4 資格取得証書授与式に出席する女性Dさん

#### 1) 障がいの概要

頸髄損傷。電動車椅子使用。安定した座位を保てないので、固定ベルトを着用。排尿用留置カテーテル使用。排泄、着脱ともに全面的な介助を要する。ベッドから電動車椅子への移乗には床走行式リフトとスリングシートを利用する。自宅で一人暮らし。介助者は複数のヘルパー。

#### 2) 衣生活上の困難

肩関節の拘縮があって袖を通すことが困難なので、上半身着はおもにニット素材を利用している。

下半身着は巻きスカート形式のみ着用している。着用の手順として、まず巻きスカートを車

椅子の上に広げ、ベッドから電動式のリフトに吊るされたスリングシートに座って移動してきたDさんがその上に腰を降ろし、巻きスカートを閉じる。この間、①褥瘡予防としてスカート布を平らに広げるために布を車椅子にガムテープで仮留、②股関節亜脱臼の状態にあるDさんの大腿部を置く位置の調整、③留置カテーテルが詰まらないような方向の確認、④スカート布の形を整えてウエストと膝上で留める、といった注意事項がある。筆者が訪問して観察したところ、寝衣から外出衣に着替えるだけで一時間以上を要していた。また、介助者がかなり経験を積まないと着用介助できない。

#### 3) 被服構成—衿なしジャケットのリフォームと巻きスカートの新調（図4）

上半身着としては、衿なしのジャケットをリフォームすることとした。その要点は①上肢をあまり動かさなくても袖が通るよう、後ろ中心の縫い目をウエストまでほどいてコンシールファスナー留めにし（図4-1）、②さらに袖通しがしやすいよう脇にひし形の襦布<sup>⑧</sup>を入れ（図4-2）、③座位固定ベルトを隠すために両脇縫い目をほどいてベンツとした（図4-3）。

下半身着について上記困難の①と④は、長方形の布を巻きスカートとして着用しようとするために生じている問題点であった。そこで座位のまま各部寸法を計測して座位に合わせた構成とした。後ろウエストには、腰に沿うように約5%収縮するようにゴムを入れた（図4-4 太線の位置）。着装手順は1)に示した従来の方法と同様である。Dさんは定期的に摘便処置を受けているので、排便前後で腹囲寸法がかなり違う。そのため巻きスカートを留める位置がかなり移動することを考慮にいれて、長い面ファスナーを留め具とした。

#### 4) 気づき

寝衣から外出衣に着替えるだけで1時間以上を要することは、筆者にとって驚きであった。社会的に種々な活動をこなしているDさんは外出の機会が多く、「整容と日焼け止めのため化粧をしたいが、帰宅後化粧落としを介助者に

依頼することをとまどう」という。

#### 事例5 子どもの結婚式に出席する母親 E さん

##### 1) 障がいの概要

二酸化炭素中毒の後遺症。ほぼ寝たきり状態で10年以上経過している。介助用車椅子使用。排泄、着脱ともに全面的な介助を要する。知的障がいがあり、簡単な発語はできるが意思疎通は不完全。自宅生活で介護者は夫と娘。娘は結婚後 E さんとは別居予定。

##### 2) 衣生活上の困難

ほとんど外出することなく、ベッドで寝たきりの状態がつづいているため、パジャマ以外は着用していない。着脱には全面的な介助が必要であるが、短時間の立位は可能である。食欲はあり、おしめを使うことと重なって、腹部から殿部にかけての周径が大きい。下肢の緊張状態が保てないため、膝頭をそろえて座っていることができない。結婚式が2月なので、E さんの娘は防寒対策を心配している。

##### 3) 被服構成－留袖をリフォームしたブラウスと巻きスカート (図5<sup>⑨</sup>)

結婚式で親族の集合写真を撮影するとき、違和感の小さいものが良いというのが、E さんの娘と夫の希望であった。そこで、親族女性の定番である黒留袖からのリフォームとした。

図5-2は下半身部分から切り取った巻きスカートのパターンで、白線はダーツの位置を示す。下肢の緊張状態が保てず膝頭が広がるのを防ぐため、膝の少し上で約10cm幅の帯状の布を緩めに巻き、これを面ファスナーで留めて左右の腿が開かないように支えることとした。これによりスカート布が股の間で垂れ下がることも防げる。

留袖の下半身部分を切り取った残りで上半身着を製作した。上半身着は、着物形式とブラウス形式の両方をトータルで試作した。二部式の着物にリフォームして付け帯を準備することは容易であるが、これまでほとんど寝たきりであった E さんの場合、肩から胸にかけて体型が変化していて、衿合わせがしにくかった。防

寒のための重ね着や体調不良時の休息のしやすさを考慮して、ゆったりしたデザインのブラウスにリフォームすることとした。

ブラウス作成の要点は、①重ね着に対応できるようにアームホールを大きくし(AH=65cm)、②袖口は防寒を考慮してカフス付きのボタン留めにした。

ブラウスとスカートの構成はおおむね事例3のCさんと類似のものであるが、スカート部分は留袖の柄を生かすため右前打ち合わせとした。

##### 4) 気づき

E さんの娘によると、E さんはかつて着物が大好きだったとのことで、E さんの娘は思い出の振袖の一部をパッチワークして使うというアイディアも提案した。しかし結婚式の花嫁の母の礼装の定番である黒留袖をリフォームするのがもっとも違和感がないだろうという結論にいたった。

E さんの娘は、「ふつうは花嫁衣装をお母さんと相談するんだろうけれど」、と言いながら、ネットオークションやリサイクル着物店で、素材となる黒留袖を探した。筆者は、それまでリサイクル着物店やネットオークションで着物を購入した経験がなかったが、特に喪服や留袖はこうした市場に、安価で多数出回っていることがわかったので、これ以降の事例研究の素材として大いに参考になった。

#### 事例6 卒業式に出席する高校3年生 F さん

##### 1) 障がいの概要

精神運動発達遅滞。介助用車いすを使用。外出に際しては座位を固定ベルトを使用する。排泄、着脱ともに全面的な介助を要する。補助者があれば、短時間の立位は可能。

##### 2) 衣生活上の困難

主たる介護者である F さんの母によると<sup>⑩</sup>、①涎が多く見た目も悪くなるし、衣服も汚れる、②膝頭が開くのでスカートは着用しにくい、③おむつを使用しており、式当日は教員に排泄介助を任せることになるので、排泄介助がしやす



い衣服が求められる。

### 3) 被服構成－袴と小紋のリフォーム (図 6)

Fさんの母は、前年の卒業式において男子卒業生が袴を着用しているのを見て、Fさんにも和服の礼装をさせたいと考えていた。訪問調査<sup>⑪</sup>の結果、上記のような困難がわかったので、袴と小紋を用意することにした。

袴については、ネットオークションで多数<sup>⑫</sup>流通しているので、これを購入してリフォームすることとした。「前紐を後ろにまわして前で交差し、再び後ろにまわして結ぶ」という一般的な着用方法をとろうとすると、Fさんの上体を前傾させて支える時間が長くなり、Fさん本人にも介助者にも負担が大きいことがわかった。一般的な前紐の結び方は、帯に前紐を絡めてしっかり締め留める目的をもつのであるが、常に座っているFさんにとって、背面で帯結びをすると、背もたれにあたって着用感が悪くなる。そこで、ウエストを一周して脇で結ぶこととし、前紐の不要分をカットした。後ろ紐は市販のままで加工しない。座位固定ベルトは相引きから袴の内側にいれて留めれば、外観に影響を与えない。

排泄介助に際して、学校では、Fさんが壁面を支えにして立った状態で、後ろから行われる。そこで、後ろの襷は開かないように縫い閉じることにより、裾の周径を抑えて扱いやすくした。このことは座って着用中のFさんにとっても、皺になって座り心地が悪くなるのを防ぐ効果がある。

女性用袴着用時の長着は、色無地か小紋が一般的である。Fさんの場合、涎のシミが目立ちにくいよう小紋とし、素材はぬれても縮んだりシミになったりしにくいポリエステルとした。図 6-2 のように、後ろ中心は座面まで、両脇は袴の相引きから見える部分を残してカットした。衿あわせのために 2 対のつけ紐を縫い付けておく。

長襦袢については、二部式の上半分のみを利用する。まず袖を取り外し、小紋の袖付け部分

の内側に綴じる。身頃には衿あわせのために、2 対のつけ紐を縫い付ける。

袴下帯は後ろで結ぶ<sup>⑬</sup>必要がないため、ウエストを一周する寸法に調整して面ファスナーで留めるものとした。

座面以下で切り取った小紋の残り部分を用いて、共布の涎かけにした (図 6-3)。

### 4) 気づき

筆者には、卒業式に振り袖や袴を着用するのは、大学の卒業式というイメージがあった。Fさんにとっては高等部の卒業式がこれに代わる位置づけにある。大学の卒業式に際しては多くの女子学生が袴を着用し、そのうちの多くがレンタル業者を利用している<sup>⑭</sup>。しかしFさんの場合は、既成品のままでは着用しにくい。

着用手順に関しては、Fさんにも介助者にも負担が少ないように試行錯誤した結果、次のようにした。① Fさんは車椅子にすわって襦袢の身頃の衿合わせをして、2 対のつけ紐を胸の左右で結ぶ、② 袴を車椅子のフットレストのすぐ前の床に置き、③ Fさんが立って袴の中に足を入れ、④ 後ろ腰を引き上げて、座ったときに腰にくる位置を定めて車椅子の背もたれにあずけ<sup>⑮</sup>、⑤ Fさんが座る。⑥ 小紋をはおり 2 対のつけ紐を胸の左右で結ぶ、⑦ 袴下帯をする。⑧ 袴の前紐を脇で結ぶ、⑨ 袴の後紐を結んで完成。

小紋を図 6-2 のようにカットしてからこの手順で着用すると、Fさんが立ち居で介助者に体重を預けるのは③④⑤の過程のみになる。

和装は、着用には一定の技術が必要であるものの、構成自体はゆとり量や寸法許容量が多く、市販衣料の規格サイズに不向きな人や、関節の拘縮がある人にも着用可能である。「ハレ」着の定番であることから、車椅子使用者が着用をあきらめてしまうとすれば残念である。

## 事例 7 夏祭りの浴衣－NPO 法人 G<sup>⑯</sup>

### 1) 障がいの概要

NPO 法人 G は、京都市で 1989 年に発足した女子車椅子バスケットボールチームのサポー

トを中心として、スポーツや音楽活動を支援する団体である。したがって、多数の関係者があり、障がいの種類や程度は多岐にわたっている。

## 2) 衣生活上の困難

本事例研究は、車椅子使用者が使いやすい浴衣をつくって、「京都から貸出可能」という情報を発信しようという試みである。したがって特定の個人のために調整するのではないところが事例6までとは異なる。

これに先立って、2001年に山口県で石川ら<sup>⑦</sup>が始めたバリアフリー浴衣プロジェクトがあった。新聞投稿により、(1)浴衣づくりに参加したい障害者(2)各家庭で眠っている浴衣の提供(3)浴衣の縫製ボランティアを呼び掛けて始められた。NPO法人Gでは2005年にこのプロジェクトから貸出を受けた経験をもとに、それを発展させて京都からも発信しようとしている。

## 3) 被服構成－二部式の浴衣と付け帯(図7)

バリアフリー浴衣プロジェクトから貸出をうけた浴衣は、筒袖やウエスト総ゴムの構成が多く、着用しやすく手動車椅子の操作がしやすいメリットがあるものの、法人Gのメンバーは、成人女性の着装としてはやや審美性に問題を感じていた。

本報での浴衣は、見た目ができるだけ通常の浴衣に近く、かつ座ったままで着用可能なものとし、リフォームの要点は次のとおりである。

まず、①縫いあがった浴衣<sup>⑧</sup>を第一腰紐のあたり(裾から約80cm)で切り離す。上半身部分は、②裾に多め<sup>⑨</sup>の折り代をとり、まつり縫い<sup>⑩</sup>にする、腰紐の代わりとして上前と下前に各1組の付紐を縫い付ける、以上は一般的な二部式着物の加工と同様である。加えて座った状態に合わせるため、③下前の腰に横向きのダーツ(図7-1矢印①)を入れて、下前襷先をあげ、④上前の上端を斜めにカットして(図7-1矢印②)上前襷先をあげる。⑤ウエストに紐を2対縫い付け(図7-2(1))、⑥左右脇に幅3cm長さ10cmのゴムを、約20%程度収縮す

るように縫い付けて腰に添わせる(図7-1太線部分)。これを11着製作した。

次に上半身部分については、障がいの程度によっては袖通しが困難な場合を想定して、5着は脇の縫い目を身八つ口から裾までほどいた。身八つ口以下は伊達締めや半幅帯程度の幅のもので覆われるし、浴衣の袖通しが困難な程度の障がいがある場合は上半身に大きな動きはないものと考えられるので、着崩れて開くことはないかと推察する。

着用にあたっては、①裾線が車椅子のフットレストにちょうど届く程度の位置に下半身部分を広げ(図7-2(1))、②着用者が座って付け紐を結び(図7-2(2))、③上半身部分をはおって付け紐を結んで襟元を整え(図7-2(3))、④上半身部分の裾が腿にちょうど届くくらいに長さ(図7-2(5)矢印)に調節して、残りを持ち上げて伊達締めで留める(図7-2(4))。帯は、市販の付け帯の着用可能であるが、試着用に、通常の付け帯と、胴回りのみで後ろの飾り結びの無いものの二種類を製作した。

歩行が可能であったり、移乗などのときに立ち上がることも想定して、このように着用した浴衣で立ち上がったときの後姿を確認したのが、図7-2(6)である。

## 4) 気づき

座面から腰を浮かせることが不可能な人や、上肢をほとんど上挙できない人でも着用可能な構成のものを含め、障害の程度に応じた選択を可能にできた。これらは、図7に補足説明をつけて、法人Gにより「バリアフリー浴衣関西」(2007.8.18)ならびに岡山の特別養護老人施設への貸出で試着され、夏のイベントに参加するにふさわしい装いとして好評であったとのことである。

貸し出し先の選定や試着者からの意見収集については、当事者団体の協力が不可欠である。事業所や学校などへの貸し出しをすすめるためには、数量を増やす必要があり、NPO法人Gのホームページからボランティアの呼びかけをしている。

### 3. 考察とまとめ

これまでの事例研究から、新調についてよりフォームについても、車椅子使用者の「ハレ」着を構成するために必要な技術は、いわゆる健康者の衣服をとりあつかう場合とまったく変わらないことがわかった。しかし、障がい当事者もしくは介助者から不都合な点や要望を聞き取り、それを被服構成に反映するにはいくつかの特異性が認められる。そこで、被服構成技術と衣生活環境の側面から留意点をまとめたい。

#### 3.1 被服構成技術について

##### (1) 後ろ身頃座面以下の処理方法

後ろ身頃の座面以下をカットする方法は多くの先行研究で指摘されてきた。カットすれば、座位のままで身丈が長いものを着用することができる反面、立位になる機会があると奇異な服装になるので、障がいの状況に応じた適用が求められる。

車椅子のままでスロープなどを用いて自家用車や公共交通機関に乗り込み、留置カテーテルを使用しているような場合は、背面の審美性よりも着脱の容易さを優先してよいだろう。ほとんど身動きができない場合は、座面以下をカットすることによって褥瘡の心配を軽減することもできる。また、シャツのように終日着用している薄手の衣類よりも、防寒コートのように手早く何度も着脱することが必要な衣類の場合は、座面以下の処理方法が一層重要である。

##### (2) アームホール寸法

肩関節の可動域が狭い場合の対処方法として、図 1-3、図 4-1 のように後ろ中心にあきを増設する、図 1-4 のように袖下脇にあきを増設する、図 4-2 のように脇に襠布を入れる、事例 3 や事例 5 のようにアームホールの大きい衣服を新調するといった対処方法がある。それぞれの利点欠点は次のように整理できる。

##### ・後ろ中心にあきを増設する

利点：別に共布を用意する必要がない  
開口部を大きくとることができる

欠点：衿付きの衣服では衿後ろ中心の処理が困難<sup>2)</sup>

ファスナーなどの留め具が着用感を悪くしたり褥瘡の原因になることがある

##### ・袖下脇にあきを増設する

利点：別に共布を用意する必要がない  
開口部を大きくとることができる

欠点：ファスナーなどの留め具が着用感を悪くしたり褥瘡の原因になることがある

厚手の布には不向きである

##### ・脇に襠布を入れる

利点：作業量が少ない

欠点：市販衣服では、別に共布の用意ができないことが多い  
審美性を考慮すると襠布の大きさに限度がある

##### ・新調する

利点：大きさや形を自由に設定できる

欠点：作業量が多く、他の方法より高度な技術が必要

着用者に被服構成に関する予備知識がないと、布から衣服への連想が難しい布地や副材料の特性と衣服デザインが適合するかどうか予見しにくい

ブランド志向やキャラクター志向には対応できない

##### (3) 巻きスカート形式

スカート形式、パンツ形式ともに、静立位を前提として構成した衣服を座位で着用すると、前後股上寸法に無理が生じる<sup>2)</sup>。巻きスカート形式の特長についてはこれまでに指摘されてきたが、その理由は次の 3 点に集約できる。

①巻きスカートでは、後ろ腰丈が長く、前腰丈が短い構成にすることが容易である。

②スカートを着用し終えてから座るのではなく、車椅子の上にスカートを広げてからその上に腰かけるという着用手順も可能である。



- ③臀部を刳りぬいた構成（図 3-5、図 5-2）  
やエプロン形式にすれば、座面から腰を浮かせることなく着用できる。

#### （4）和装

和装は、着用には一定の技術が必要であるものの、構成自体はゆとり量や寸法許容量が多い。身八つ口が開いているので、立体構成衣服におけるアームホール寸法の制限はないに等しい。したがって関節の拘縮があつて可動域が小さくなった人にも無理なく着用できる要素を持っている。和装は、「ハレ」着の定番であり、車椅子使用者が着用をあきらめてしまうとすれば残念である。

### 3.2 衣生活環境について

Dさんは事例研究に極めて協力的であり、着脱や摘便などの様子を観察させてもらったことは、筆者にとって貴重な経験であった。本報以前の事例調査<sup>②</sup>で、頸髄損傷の男性から、ネクタイを結ぶのは無理としても、帰宅後ネクタイをはずすことができれば、心おきなく遅い時間に帰宅できるので、自分で外せるネクタイがほしいという希望が寄せられたことがある。訪問調査をすすめていくと、車椅子使用者の衣服構成を考えるには、モノとしての衣服のみでなく着用者の生活全般を視野に入れることが不可欠であると気づかされる。

日常的には、ニット素材など寸法許容量が大きく、関節の可動域が狭くなっている程度無理をすれば着脱可能な衣服を常用している場合、「ハレ」着が必要になったときに、いつ、だれが不都合に気づき、どのように解消できるであろうか。筆者は訪問調査をととして、介助者や家族のなかに高齢の女性がある場合は、繊維製品に関する種々の技術を駆使して、障がい当事者の生活を支えている現実を目にしてきた。しかし大量生産大量消費型の社会のなかで、縫製に関する技術は国民一般からは遠いものになりつつある<sup>③</sup>。本報で述べたような調整や新調を、社会のなかで誰が行い、その対価はいくらになるであろうか。

個の必要に応じたモノづくり、必要なものを必要なだけつくること、身の回りにある不都合は修正する能力を持つ、といったことについて再考すべきであろう。そうでなければ、超高齢社会と高度医療技術に支えられて増えるであろう車椅子使用者の衣生活を取り巻く環境を変えることは、できそうもないと思われる。衣服の新調やリフォームに際して、当事者やその家族、介助者などとかかわるなかで、衣服の持つ社会的な機能を再認識した。「ハレ」の場にふさわしい服装の用意があるということは、各個人の尊厳にかかわる。

#### 注

- ① プライバシーに配慮し、障がいの概要を含め当事者の個人情報、被服構成を考えるのに必要な最低限度の聞き取りを行っている。
- ② Dさんは長身やせ形の体形であり、着脱を考えてかなり大きめのパジャマを着用している。太めの体形の人の場合、「大きめのパジャマを買う」という対処も難しいであろうと思われる。仮にできたとしても袖丈やパンツ丈をかなり詰める必要がある。パジャマはサイズ直しを前提とせず販売されているので、加工依頼をすると、その代金は購入代金をうまわまることもありうる。
- ③ 調査時点での学校区分名称。
- ④ Bさんとは養護学校に在籍中、アンケート調査の協力者として知り合った。大学合格の知らせを受けた時点では、入学式の衣服着用に困難があるとはBさんも筆者も考えていなかった。
- ⑤ たとえば、小澤洋子『こんなおしゃれがしたかった高齢者・障害者のよそおい』2001年 一橋出版 p82、83、栗田佐穂子『おしゃれで着やすい介護服』2003年 ブティック社 p2、3、18、19、20、30、森南海子『からだをいたわる服づくり』2003年 未来社 p209など。
- ⑥ 猿田佳那子「頸髄損傷者を対象とした衣生活実態調査にみる現状と課題」日本繊維製品消費科学会誌 Vol 45（2004年）
- ⑦ 蓄尿袋が目立たないようにという要望を開けたことは、衣服を研究テーマとしている筆者にとって気づきににくいことであり、今後の事例研究の参考になった。

- ⑧ なお襦布などリフォームに必要な共布は、もとはスーツであったので、スカートを切つてこれにあてた。
- ⑨ 本報掲載写真の着用者は、Eさんの都合により、20歳代の女性で代替した。他の写真については掲載の承諾を得ている。
- ⑩ Fさん自身が困難に感じているかどうかは確かめにくいので、Fさんの母からの聞き取ったことを述べる。
- ⑪ 同志社女子大学3年生中泉恵理が、社会福祉法人での支援活動をとおしてFさんと接しており、共同で聞き取り調査をした。Fさんの生活全般については、中泉「車いすでも着装可能な浴衣のリフォーム——袴の着装にむけて」演習F2レポートにまとめられている。
- ⑫ 市販の袴は、その構成上の特徴から、SMLのサイズ構成で販売されており、身長のみで適応の可否を判断できること、式服として多数かつ安価に流通していることから、本報のような試作には利用しやすい。
- ⑬ 一般的に袴下帯は①長着の前合わせを確実にし、②後ろの結び目に袴腰を乗せ、③前紐の上から覗かせる装飾の効果、の3点の役割をもつ。本報で製作した帯は①と③の機能を持つ。
- ⑭ 2008年12月に同志社女子大学4年生を対象にアンケート調査をしたところ、86.7%が袴を着用する予定であると回答し、その理由としては90.4%が「卒業式らしい服装だともうから」と回答した。また、65.0%は業者からのレンタルを利用すると回答した。
- ⑮ 袴の位置を調節しやすいように、後ろ腰に打ち紐をつけて、打ち紐を背もたれにかけることによって、後紐を任意の高さに保つ方法をとると着用助がしやすかった。
- ⑯ NPO法人Gの活動については、2005年度同志社女子大学被服学研究室卒業研究「頸髄損傷者を事例にして考える身障者の衣生活」三木沙織にまとめられている。
- ⑰ 詳細は<http://www.c-able.ne.jp/~daisuke/yukata.htm>、石川ミカ『車いすのリアル』2003年大和書房参照。
- ⑱ 10着の既製品浴衣をチームGが、半幅帯2本と浴衣1着を筆者の研究室で用意した。
- ⑲ 通常裾の縫い代は1cm程度であるのに対して、ここでは「おはしより」に見えるような厚みを出すためかなり多め（7～8cm程度）にしたからである。
- ⑳ 今後数量を増やす際には、作業の手間を考えると、上前のみ手縫い、下前はミシン縫いでもよいと考えるが、チームGのサポーターとして裁縫ボランティア参加者があり、手縫いに熟達していたための選択である。
- ㉑ この点について岩波は、裾から上に向けて開き、衿付けの手前で止まるファスナーを提案している。岩波君代『みんなにやさしい介護服』2005年文化出版局 p17
- ㉒ 岩波は市販のタイトスカートの前股関節部分にダーツを入れる方法を紹介しており、着用状態をみると、座位で裾線が整うことがわかる。岩波前掲書 p17
- ㉓ 猿田佳那子「頸髄損傷者を対象とした衣生活実態調査にみる現状と課題」日本繊維製品消費科学会誌 Vol 45（2004年）
- ㉔ 筆者は、車椅子使用者用の雨具の商品化に携わったなかで、市販商品開発のための試作品を1着だけ作るだけでも、海外の縫製工場を経由しないとできない状況を知った。詳細は猿田佳那子「製作実習」のもつ意義——生活デザインの視点から『家庭科教育』78巻12号2004年 p16-20



図 1-1 事例 1 男性の礼装



図 1-2 ジャケット (前)



図 1-3 ジャケット (後)



図 1-4 シャツ



図 2 事例 2 男性のジャケット



図 3-1 事例 3 女性の礼装



図 3-2 ブラウス (前)



図 3-3 ブラウス (横)



図 3-4 後合わせの巻きスカート (後)

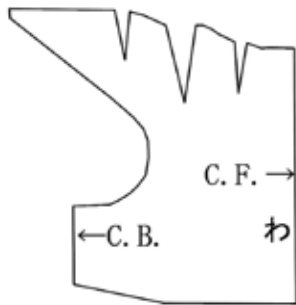


図 3-5 後合わせの巻きスカート (パターン)



図 4-1 事例 4 女性のジャケット (後)



図 4-2 脇の褶布



図 4-3 ジャケット (横)

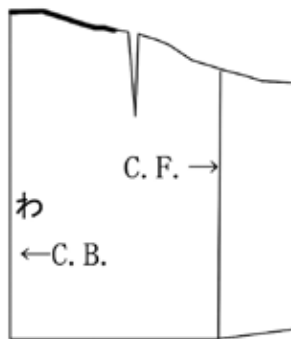


図 4-4 前合わせの巻きスカート (パターン)



図 5-1 事例 5 留袖からリフォームしたブラウススーツ



図 5-2 留袖からリフォームするスカート部分



図 6-1 事例 6 女子高生卒業式 (左：教員、右：卒業生)



図 6-2 小紋のリフォーム (後)





図 6-3 小紋と共布の涎かけ

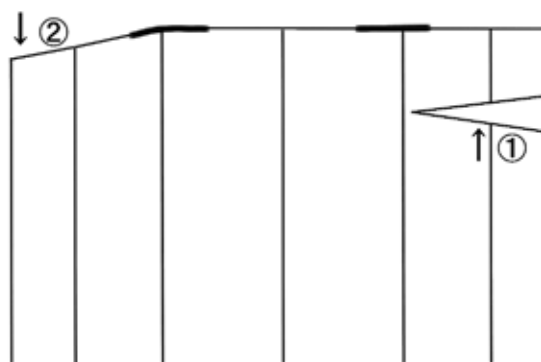


図 7-1 浴衣の下半身部分（パターン）



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)

図 7-2 二部式浴衣の着用手順